

令和四年（二〇三二）三月二十五日発行
『大倉山論集』第六十八輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

魂をうちだす鍛冶のこころもて―大倉山修養会の目的と実践―

星 原 大 輔

魂をうちだす鍛冶のころもて―大倉山修養会の目的と実践―

星 原 大 輔

目 次

はじめに

一 大倉山修養会とは

(一) 研究所主催の修養会

(二) 外部からの要請に基づく修養会

二 大倉山修養会の「内容」

(一) 無言の行（無言厳守）

(二) 定坐

(三) 食事

(四) 作務

三 大倉山修養会の「目的」

(一) 「修養」とは

(二) 「修養」における「行」とは

おわりに

はじめに

本稿の主題は、大倉精神文化研究所の創立者・大倉邦彦の和歌「魂をうちだす鍛冶のころもてはげみつくれよ日の本のわざ」から採っている。そして副題にある「大倉山修養会」とは、戦前、大倉精神文化研究所本館（現横浜市大倉山記念館）にて研究所が主催していた事業の一つである。

本稿で大倉山修養会を取り上げる理由について、主催者である大倉が研究所を創立するに至った背景から説明しておきたい。^①大倉は大倉洋紙店（現新生紙バルブ商事株式会社）の三代目社長などを務めた実業家であった。同社は紙問屋を代表する企業の一つで、創業以来、社員教育に重点が置かれていた。その背景には、初代社長の大倉孫兵衛から受け継がれていた、「自身の人格を高めることが、結果的に成功へとつながっていく」という理念があり、大倉も同様の考えを持っていた。例えば、社員教育のテキストであった『商売往来』には、

利益問題を中心としたる交際は永続せざる様に、商売も金儲の為とのみ考ふれば繁榮せず。天の命人の道と考へ、真の親切心より出たる営業は、自他共に喜びに満ち、店内を浄化し、得意先は親友の間柄となる。されば人格と労力に対する正当の報酬として利益を生ず。^②（引用文の傍線は筆者による。以下、同様）

とあり、また『大倉洋紙店綱領』にも、

一般商工業に従事する実業家にして、誰か利益を念はざるものあらん。然りと雖も汲々として利に走り、打算の為には、手段を撰ばざるが如きに至つては、実業報国の精神を没却するものにして、吾等の断じて採らざるところなり。吾等は平等慈悲の大願に立脚し、古人の言の如く、徳を積めば利之に伴ふべきを信じ、之を実業界に施して決して過つことなきを確信するものなり。^③

とある。

また、大倉は、商売とは「世の為に」行う「貴重なる天職」であって、天からの「副産物」で生じた利益は隣人の裨益となり、国家社会を繁栄させるために使わなければならないという商業理念を持っていた。

商売の目的は、何であらうか。私利を営む手段であつてはなるまい。世の為に専念すれば、自ら利益の副産物が収められる。その副産物をば、己の欲望満足にのみ費してはなるまい。国家社会を繁栄させる肥料としなければならぬ。それが、神ながらの商売道である⁴。

彼が社長に就任したのは大正七年（一九一八）で、ほどなく第一次世界大戦後の戦後恐慌が始まり、大正十二年（一九二三）九月には関東大震災が発生するなど、日本社会全体に不安感が広まった時代であつた。こうした中、社員教育に重きを置いていた大倉は、「国家社会を繁栄させる肥料」として教育事業に着手し始める。大正十三年（一九二四）に富士見幼稚園を設立して幼児教育に、昭和三年（一九二八）には郷里の佐賀県神埼郡（現神埼市）に農村部の女性を対象とした農村工芸学院を開校して女子教育に尽力した。

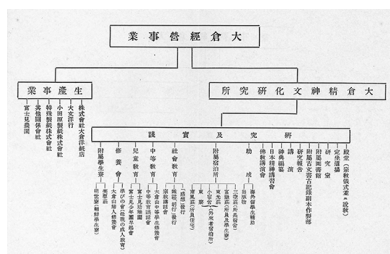
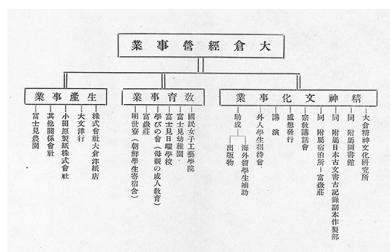
このように教育事業に取り組んでいた大倉は、当時の社会情勢を鑑みて、多くの人びとが「宗教的信念に立脚せる正しき人生観」を持ち、「人類文化の普遍的意義」と日本の「精神文化の本質的価値」を精究して、「正しき信念に基づく国家観」を身に付けなければならないと考えようになつた。そこで、その指導者たる人材の育成を目指し、昭和七年（一九三二）四月に大倉精神文化研究所と附属図書館を設立したのである。そのため研究所では、「知性」「人類文化の普遍的意義」「精神文化の本質的価値」を身につける「研究」（「精神文化の精通」と併せて、「心」「正しき信念に基づく国家観」を育む「実践的躬行」「教育実践」が実施された。

本稿で取り上げる大倉山修養会は後者の「教育実践」の一つで、戦前の研究所運営を考察する上で欠くべからざる

事業の一つである。そこで本稿では、今後の大倉邦彦及び大倉精神文化研究所に関する調査研究の手がかりとして、大倉山修養会の概要を整理し、その背景にあった大倉邦彦の思想などについても試論を述べてみたい。^⑤なお書簡等の原資料を引用する際には、旧漢字は常用漢字に改め、適宜句読点を付した。

一 大倉山修養会とは

昭和十六年（一九四一）五月の『私の使命事業』で、修養会は「本所の研究の一面と併行して教育的実践の重要部門をなすもの」とあり、研究所の重要な事業の一つとして位置づけられている。しかし設立当初から存在していた事業ではなかった。



【図1】(上) 昭和七年度の「大倉経営事業」
(下) 昭和九年度の「大倉経営事業」

大倉は自らが展開していた諸事業を「大倉経営事業」として体系化し、その組織図を『私の使命事業』に掲載している。昭和七年度のものを見ると、①「精神文化事業」、②「教育事業」、③「生産事業」の三部門に分けられている（【図1】上図）。昭和九年度になると、①と②が統合して「大倉精神文化研究所・研究及実践」となり、「生産事業」の二部門に整理されている（【図1】下図）。そして注目すべきは、前者にはなかった「修養会」の文字が明記されていることである。そのきっかけとなった

のが、昭和八年（一九三三）の第一回大倉山中等学生修養会であった。後述するように、参加者や保護者から好評を博し、継続して開催されることとなり、事業の一つとして組み込まれたのである。

以後、大倉精神文化研究所の「研究所沿革史資料」⁽⁸⁾で確認できる限りでは、昭和八年八月から昭和十九年（一九四四）八月までに総計四百二十回の修養会が開催され、延べ一万三千四百八十一名が参加している。平均すると、毎月三回、参加者は約百名となり、修養会が「教育的実践の重要部門」と位置づけられたのも首肯されよう。

（一）研究所主催の修養会

研究所が主催する修養会には、二つの形態があった。

一つの形態は「本所より会員を募集して催すもの」⁽⁹⁾で、その代表例が大倉山中等学生修養会である。この第一回が研究所における修養会の端緒となったが、そのきっかけは日本女子大学校（現日本女子大学）の卒業生団体・桜楓会の横浜支部会員からの依頼であった。

昭和八年（一九三三）七月二十八日付の桜楓会横浜支部「中学生夏期講習会趣意書」には、

現在の中等教育はあまりに知識教育に偏して、宗教的情操教育を欠き、行を通しての体験的教育や意志の訓練が軽視されて居ります。

殊に中学二、三年頃は自己意識の発達時代で、家庭教育の困難な時期であります。

この時期に以上の欠点を補ふ為に別記の様な時間割で一週間の講習会を催し度いと存じまして、その御指導を大倉精神文化研究所々長大倉邦彦先生に御願ひ致しましたところ、幸に御快諾を得ました。大倉精神文化研究所は海拔百五十尺の丘上に位し、眺望勝れ、環境やその他の教育的条件も具備してゐる理想的な教育の道場でありま



【図2】第3回大倉山中学生修養会、昭和9年3月（研究所沿革史資料6863-271）

すし、直接大倉先生が子供達と寝食を共にして御指導下さることになりましたので、本講習会の目的は十分に達し得らるゝこと、信じます。¹⁰⁾とある。

大倉家と日本女子大学の関係は、義祖父の大倉孫兵衛が創立準備金を成瀬仁蔵に寄附した時から始まり、義父の大倉文二、そして大倉邦彦もまた同校へ資金を寄附している。¹¹⁾そのため、大倉は学校関係者や桜楓会と交流を持っていたようで、その縁を頼りに母親たちが思春期の子育てに関して大倉に相談したのである。

かくして桜楓会横浜支部会員の子どもを対象とした修養会が、昭和八年八月十二日から十七日までの期間で開催され、「寝食を共にして、厳肅なる宗教的雰囲気の中に行を通した教育」が施された。

各行事の具体的な内容は後述するが、その成果は母親たちの期待を大きく上回り、引き続き開催される運びとなった。

其の結果は予期以上の好成績を収め、其の反響は蓋し尠からざるものがありました。其の後学生父兄より継続開催の切なる希望もあり、且つは時世に鑑み引続き春夏冬の休暇毎に催して居ります。（中略）本修養会は回を重ねる毎に参加者の数を増し、且つその範囲も広く全国各地に互つて、漸次盛大に赴きつゝ、あります。¹²⁾

現存する資料では、計二十八回開催されており、延べ一千四百四十五名が参加している。参加者名簿を見ると、横浜から全国各地の桜楓会支部へと評判は広がったようで、遠くは九州からの参加が確認できる。また他の中等学校か

ら、そして高等学校生や大学生も参加するようになったため、名称も大倉山中等学生修養会から大倉山学生修養会へと改められた。

さらに、大倉に相談した母親たちにもその影響は及び、第一回大倉山中等学生修養会が終了してから一ヶ月後の九月二十二日に大倉山婦人修養会が発足した。翌九年に関係各所に配布された案内状には、以下のように記されている。

（前略） 昨年夏初めて御開き頂きました中学生修養会が、僅かの日数で子供達の心機を一転し、物の見方や考へ方ががらりと変り、覚めてくれました結果、親達の感謝となり、却って母が教へられ、先以て母親が修養せねばならぬと考へさせられました。その結果御多忙でいらされます大倉先生に厚がましくも御願ひ致しまして、昨年九月末より婦人修養会が生まれました。

毎月第一、第三の金曜日午後一時半から大倉山に於て、いつも三十人位の母親達が續けて御講話を伺つて居ります。世間の婦人の集りは、往々本来の目的から離れ、却つて種々の弊害を醸して居りますが、本会は全く修養中心の会合で、会を重ねる度毎に知らず知らず尊い御力に引かれ、漸次修養の道を進みつゝあります。御一方様でも多く此の幸ひを御分け致し度く、何卒御来会を御進め申上げます。（後略）⁽¹⁴⁾

当初は大倉山中等学生修養会に参加した子ども達の母親、すなわち桜楓会横浜支部会員で構成されていたが、次第に首都圏の桜楓会からも参加するようになってゐる。なお、戦後しばらくして彼女たちはふたたび大倉に教えを乞うようになった。のちに大倉山坐禅会へと合流したという。⁽¹⁴⁾

この他、大倉が経営していた富士見幼稚園の保護者、母親を対象とした「学びの会」も開かれていた。⁽¹⁵⁾



【図3】神奈川県女子師範生徒修養会（昭和10年11月）（研究所沿革史資料6874-49）

（二）外部からの要請に基づく修養会

もう一つの形態が「外部よりの依頼によりて催すもの」である。資料を追っていくと、その依頼者の業種は少しずつ変化していることが確認できる。

まず頻繁に開催され始めたのは、教育関係者を対象とする修養会であった。県内外の学校長、教職員（訓導）、師範学校生らの修養会が開催されるようになったのは、大倉山中等学生修養会（大倉山学生修養会）の評判が関係者の間で広がったためであろう。昭和十二年（一九三七）になると、依頼業者は多様化していく。中でも回数が多いのは、神奈川県周辺の公務員や警察官と、東洋大学の学生を対象とした修養会である。後者は大倉が学長に就任したため、その後、全新生生を対象と

した修養会も大倉山で開催されている。

そして昭和十四年以降は一般企業や業界団体からの依頼が大部分を占めるようになる。主なものを列挙すると、芝浦製作所（現東芝）、東京横浜電鉄（現東急電鉄）、大倉洋紙店（現新生紙パルプ商事）、ディーゼル自動車、日産自動車加工部（現日産自動車）、東京洋紙店主有志、東京洋紙商組合、大倉土木株式会社横浜出張所、富士通信機製作所、松屋・松坂屋、三省堂、東京鍛工所、六櫻社（現コニカミノルタ）などである。この背景としては、十四年に「日本精神による産業のあるべき姿」を提唱した、大倉著『日本産業道』¹⁷⁾の刊行、そして大倉が翌年十一月に結成された大日本産業報国会の理事に就任したことが考えられる。¹⁸⁾

二 大倉山修養会の「内容」

研究所で開催された修養会の開催期間はまちまちで、最短で半日、最長で七日間となっている。二日間以上に互る場合は、「参加者は期間中本所内に宿泊し、大倉所長の指導の下に所員数名夫々班長の任に当り、本所所定の厳重なる規範に準じ、真摯なる体験修行の生活を」¹⁹⁾「過ごすことになっている。

ここに「体験修行の生活」とあるように、会期間中はさまざまな行事が実施された。第五回大倉山中等学生修養会（昭和九年八月二十二日～二十七日）の第二日目の行事進行表は、【図4】の通りである。ここにある各行事の内容は、「第一回大倉山中等学生修養会趣意書」に

現在の中教育はあまりに知育の一面をのみ偏重して宗教的情操教育を欠き、行を通じての体験的教育や意志の訓練が軽視されています。従って全人格的陶冶と信念の養成とは最も強調され、且つ実践されなければなりません。²⁰⁾

午前		
5:00～5:20	起床洗面	梵鐘
5:20～6:00	清掃体操	半鐘
6:00～6:20	神前礼拝	半鐘
6:20～7:00	定坐	板木
7:00～8:30	朝食	半鐘
8:30～9:30	所長講話	半鐘
9:30～12:00	自習	
12:00～13:00	昼食、休憩	
午後		
13:00～14:00	唱歌及読経練習	半鐘
14:00～15:00	作務	半鐘
15:00～15:30	お茶	梵鐘
15:30～17:00	作務	半鐘
17:00～18:00	入浴	半鐘
18:00～19:30	夕食	半鐘
19:30～20:30	茶礼	半鐘
20:00～20:30	定坐	半鐘
21:00～	就寝	梵鐘

【図4】「私の使命事業 皇紀二五九四年度」（研究所沿革史資料No.6874-49）を基に作成。

とあるように、①「宗教的情操教育」、②「行を通じての体験的教育」、③「意志の訓練」の三つの観点から立案されたと考えられる。

本章ではこの進行表に沿って、主要な行事の概要及びその目的、そして参加者の感想を紹介していこう。

なお、修養会に参加するにあたっては、

主観と自慢がある間は、心の修養は難かしい。部屋掃除するにも、一切の道具を一度外に持ち出さなければ、本当の掃除は出来ない。⁽²¹⁾

あるいは、

人間は後天的な学問・知識や位階・財産を剥ぎ取つて、始めて真の自己を見得る。斯くしてこそ、後天的な一切の持物は真の自己の肥料となる。草木は落葉して、真の姿を現はし、且つ自らの根を養ひつゝ、あるではないか。といった大倉の言葉に見られるように、修養会期中は「外の平凡な考へ方」「後天的な学問・知識や位階・財産」を脇に置かなければならないとしていた。そこで冒頭で、指導員たちは参加者に、「今日一日は社会的な階級とか地位や身分を忘れ、一身を「大倉精神文化研究所」に委し、その掟に従つて行動するを要し一切無言であること、また自分のことは自分でなさねばならぬ」⁽²²⁾と、説明していた。

(一) 無言の行（無言厳守）

修養会の会期中を通して課せられていたのは「無言の行」、すなわち会話をしない、言葉を発してはならないということであつた。その目的について、大倉は以下のように語っている。

人間口を利くということは自分の五感をそれに従わせる。いや自分だけではない、全部の人の気持をそこに向けさせることになりますから、自他の心を乱す。無言でいると、見れば見たまま、聞けば聞いたまま、何ものにも煩わされることなく、本当のものを見聞することが出来る。⁽²³⁾

会期中五日間生徒には無言を厳守させることにしている。騒がしいからそうさせるのではない。外にのみ向つて

働き勝ちな意識を内に向けて内観せしめる回向辺照の態度なのである。⁽²⁵⁾

この行事は自分の思想、言動などを深くかえりみる「内観（内省）」へ導くことが目的であった。ただ会話という行為は極めて日常的な営みであるためか、感想文を通読すると、修養会中に実施された行事の中でも、この「無言の行」に苦痛を感じた参加者がかなり多いという印象を受けた。その中で、主催者側の意図が見て取れるのは、次の感想文であろう。

（神奈川県庁職員） 如何にこの無言にて己自らを反省できる事でしょう。併し始めはとかく話したくありませんが、ちであつた。今まで僕は半日として無言にて静かに自ら省みた事が無かつたので、如何に長いものかを味わられず、此処に来てより一日半の間。或は定坐の時、或は神の前で、或は作務の時、其の場／＼において、総べてを忘れて無念無想でその時々をすごした後の心のすがすがしさ。どうしても人間は其の日の内、たとへ一〇分でも静かに坐して心をおちつけて行ふ時は、決して曲がつた事は決してしないだろうとつくづくと感じた。⁽²⁶⁾

（神奈川県小学校校長） 全く過去の自分の職責に於ける一切のものを、無言であればある程、無言の中に思索すればする程、まざまざと心中に往來するを覚えました。⁽²⁷⁾

以上より、「無言の行」は前掲した三つの観点のうち、②「行を通じての体験的教育」、③「意志の訓練」に該当する行事と言えるであろう。

（二）定坐

定坐とは坐禅のことである。現在の横浜市大倉山記念館ギャラリーはかつて坐禅道場として利用されており、二日間以上に亘る修養会では、朝と夕の二回行われた。大倉は発心寺住職の原田祖岳に就いて参禅しており、自身の体験



【図5】修養会中の定坐（研究所沿革史資料6878）

から取り入れたのであろう。この目的を以下のように語っている。⁽²⁸⁾

定座とはその内容から云えば禪定坐禪の意味であつて、ここに生徒達は自らの心魂を燃やすのである。生温い気持や単に試みんとするような不徹底は絶対に許さない。お互いの魂が火花を散らす底の峻烈な鍛錬の坩堝である。尤もこの定坐は所謂禪宗の一宗一派に偏して、見性成仏を願ひ、或は公案の階梯を踏んで悟りの証課を求めることに主眼を置くのではない。それかと云つて又、減入のような小乗的瞑想によつて、消極的に気持を落着けるといふただの静坐でもない。⁽²⁹⁾ 積極的に全霊を挙げて緊張し、その極度に於けるひたすらなる定坐である。

定坐を開始する前に、参加者一同で、次の文章を朗誦していた。

「初発心自戒文」

汝等諸人この山に来てつて道の為に頭をあつむ。衣食の為にすること勿れ。肩あつて着ずといふことなく、口あつて食はずといふことなし。只須らく十二時中皇運扶翼の道を行じ去るべし。光陰矢の如し、慎んで放心すること勿れ。

「常思猛進偈」

一、今日の一日も、死際の一日も変りなし。短き命を意義深く力強く、愉快に生きん為には、明日の日をまたず、今日より取りかゝらん。

二、現実刻々の生活の場所が、そのまゝ、信仰の道場なり。斯くてこそ信仰は力となり、喜悅となり、命となる

ことを信ず。

みづには

三、日々三省して心鏡を磨き、宇宙正法の如実に顯現せんことを祈り、正しき人生觀を確立して、真と善と美とを踏占めつゝ、信ずる所に邁進せん。

よつには

四、我が民族は天孫を中心として、史的発展をなし、国家生活に於て、天才的國民たりしを自覚自重し、赤誠報國の大乗國民たらんことを念願す。

いつには

五、礼節を知るものは、衣食足るに至ることを信ず。

かくして【図5】のように、参加者一同は壁に向かって並んで禪を組むのである。中等学生修養会のある参加者の感想文には、

定坐は最初の日は、先生がいきなり大声でどなりつけられて、まるで自分一人が怒られているかのように、その度々にびくつと感じた。又あちこちでピシピシいう警策きようさくの音が聞こえてくるのを、まるで酷使されているような心持で、これほどつらいものはないと思ったが、三日目頃からやや慣れて足の痛みも大分直ってきた。しかし、定坐の後は寝起きの疲れた氣持がぬけて、さーっと心がすき通るような氣になったのは全く不思議な位だ。³⁰⁾とあり、緊迫した雰囲気伝わってくる。

この定坐は前掲した三つの観点のうち、①「宗教的情操教育」、②「行を通じての体験的教育」、に該当すると言えるであろう。

(三) 食事

朝の定坐が終わると、いよいよ朝食となるが、修養会では朝昼夕の三食も行の一つであった。

食事の際には、二つの注意事項があった。⁽³¹⁾一つは無言の行は当然継続するが、食器の上げ下げ等でも音を立てないようにすること。もう一つは、参加者同士で食事の盛り付けなどを協力して行うことである。これらを含めて、大倉は「食事」の意義を、次のように説明している。

厳肅な食法に従い、一人一人布包みの自鉢を持って頂くことにしている。お互いに食事を盛り合つて、一同盛り終れば、御飯のお椀を目の高さに捧げて軽く瞑目し、次のような食前の感謝を述べる。(中略) 尚おまた、物に対する考え方を、貨幣価値によってのみ決定しようとする態度を改めて、日本古来の神物一体観へと導くことも、この食法の中に学ばせるのである。(中略) 物は神仏の恵みであり、その中に生命と霊のこもっていることを徹底認識せしめるのである。(中略) 一同が食事を終れば自らお茶と沢庵の一片を以て食器を洗つて、もとの通りに包みにおさめる。これは大勢の食器を洗うという手間を惜しんでのことではない。感謝報恩の気持でそうするのである。⁽³²⁾

引用文中にある「食前の感謝」とは、次の通りである。

- 一 此食物が食膳に運ばれる迄には、幾多の人々の労力と神仏の加護によることを思つて感謝致します。
- 二 此食物に向ひ、旨いからとて貪る心、不味いからとて厭ふ心を起しません。
- 三 私わたくしの徳行とくこうの足らざるに、此食物を頂くことを過分に思ひます。
- 四 此食物は私共の心身を癒す良薬と心得ていたゞきます。
- 五 此食物は道を成就せんがために、頂くことを誓ひます。

こゝでも、参加者の代表的な感想文を紹介しておこう。

(埼玉県女子師範学校生徒) 食事は私たちにとって行わなければならない事である。即ち自分達が生命を全うせ



【図6】大倉山学生修養会における作務
（研究所沿革史資料6874-77）



【図7】神奈川県橘樹郡女子訓導修養会
の作務／昭和10年6月（研究所
沿革史資料6874-83）

（四）作務

大倉の説明とこの感想文から推すと、食事の行も、定坐と同様に、①「宗教的情操教育」、②「行を通じての体験的教育」の観点から位置づけられていたと言えるであろう。

ねばならないからで、その食事については大して感激も、有り難さも知らずに、時間が来ると、人の作って呉れた温かい物を食べて、それが当たり前に思っただけで平気で食べていた。然しこうして真から食事の有り難さを考える時、一粒の御飯にも一切れの沢庵にも、もったいないと云う気持ちを持たなければすまない、と云う気持ちにうたれた。³³

一般的に、作務とは禅寺で僧が行う採薪や掃除などの労務のことを言う。しかし、研究所では主に「汗にまみれながら、黙々として鋤を振るい土を掘る」³⁴作業であった。具体的には、研究所本館周辺の道を整備したり、前庭を整地して植栽を行ったりである（図6、7）。現在の東急大倉山駅から横浜市大倉山記念館、大倉山公園梅林までの舗装された道や大倉山公園の豊かな緑は、こうして形成されたのである。

当然のことながら、作務の最中も無言

でなければならぬが、途中で大倉が作詞した「修養会会歌」を参加者一同で歌ったという。歌詞は、左の通りである。

一 天地に暗雲こむる時／大倉山の暁の鐘／大空高く響くなり／時こそ来れ日東の／男の児は夢を蹴破りて／今雄々しくも奮ひ立つ

二 心を清め身を正し／嚴の宮居にかむながら／神寂びませる天照す／神の御前にぬかづきて／君と国とに捧げんと／とはの誠を誓ふなり

三 靈氣身にしむ道場に／肅々として端座せば／峻烈凜と警策は／名刀鍛ふ響きあり／みたましづめつ腹をねり／不滅の命身にうけん

四 思ひを静めつ、ましく／命の糧ぞ一粒の／米に籠る神仏の／深きめぐみをかしこみて／皇国の道を成ぜんと／堅く誓ひて食を受く

五 いかなる業もいとはじと／大地ふみしめひたすらに／労働禪を行じつ、／玉なす汗をふりはらひ／無言の作務にゆるぎなき／大信念をきたはなん

六 七度生れ大君に／仕へまつらん覚悟もて／逆らふ波のあらくもと／乗り切る力われにあり／大和男の児の意気は燃え／船出する日は近づけり

この作務と同じように、肉体労働を課していた修養会は他にも存在していたが、大倉や研究所所員と一緒に作務に従事したことに、多くの参加者は驚いている（図8）。複数の修養会に参加したある小学校校長は、

他の修養会にては指導者が説明して口先にて色々世話をやくに留まるに、大倉修養会は指導者が一丸となり指導されるには敬服³⁵。



【図8】作業服を着て作務に参加する大倉邦彦（研究所沿革史資料6764-342）

されてから、見方がすっかり変り、自分として出来る限りは働ける気持になりました⁽³⁶⁾。と感想文に書き記している。

大倉と所員たちのこうした行動の背景には、大倉が知識を習得するだけではなく、それを実践実行しなければならないという信念を持っていたことがある。彼は、「実践躬行」を座右の銘としていた。

この「作務」は、②「行を通じての体験的教育」、③「意志の訓練」に該当する行事であったと言える。

そして作務が終ると、入浴、夕食、茶礼、定坐と行事は続き、ようやく就寝時間となるが、その前に「就寝前の朗誦」を一同で行う。

我等は今日為すべき行事を為し了れり。義務と奉仕と忍耐とは我等の良薬なり。我等は神明に対する唯一の尽すべき途を、尽し了れることを感謝す。就寝に当り、妄念を離れ、一切を神明に任せ、大安心を以て眠に就かん。かくして参加者たちは寝に就き、翌朝五時になると研究所本館の塔屋に吊るされていた銅鐘が鳴り響き、新しい一日が始まるのであった。

と、また学生修養会の参加者も

労働は初めてのことで、大体土を掘ったり運んだりすることは、人を備ってやらせるものだと思って居りましたのに、先生が先に立ってやられるので、二重にも三重にも驚きました。（中略）運動とちがつて身体はくたびれるし、面白くもおかしくもないので、いやになりました。ところが、（中略）「実行なき理論は概念の遊戯だ」というお話をきか

三 大倉山修養会の「目的」

ここまで大倉山修養会の概要を紹介してきたが、主催者である大倉邦彦は如何なる考えに基づいて修養会を開催し、各行事を位置づけていたのであろうか。本節では、この点について考察してみたい。

(一) 「修養」とは

そもそも、大倉は「修養」の意味を、どのように捉えていたのであろうか。

国語辞典で「修養」を引いてみると、「精神を錬磨し、優れた人格を形成するようにつとめること」⁽³⁷⁾、「道徳心をみがき、人格を高めるように努めること」⁽³⁸⁾、「学問を修め精神をみがき、人格を高めるよう努力すること」⁽³⁹⁾「学問をおさめ、徳性をやしない、より高度な人格を形成するように努めること。精神を錬磨し、品性をやしない、人格を高めること」⁽⁴⁰⁾とある。

そもそも「修養」は「culture」「cultivate」「cultivation」の翻訳語で、明治三十年代に定着したとされている。⁽⁴¹⁾例え、中村正直が明治四年（一八七一）にスマイルズ『自助論』を訳して刊行した際、英文の

In the school of labour is taught the best practical wisdom: nor is a life of manual employment, as we shall hereafter find, incompatible with high mental culture.⁽⁴²⁾

を

学校に於て教ふところのものは、人をして工事習練^{タビシツデガカル}の上よりして、心智を開き、考察^{カウガエガ}を長ぜしむる事なり。是故に労事を勉め、工役を執て、その生涯を為る間に、心霊の修養^{タマシイノホシメヤシナフ}も自らその中に具れる事なり。⁽⁴³⁾

と訳している。

その後、内村鑑三、横井時雄、松村介石、植村正久、徳富蘇峰など、キリスト教に強い感化を受けた人びとが修養に関する文章を発表し、明治三十年代後半には青年層の関心が高まり、修養に関する出版物が次々と刊行された。中でも版を重ねたのが、明治四十四年（一九一）に刊行された新渡戸稲造『修養』⁽⁴⁴⁾である。新渡戸は「修養とは修身養心ということであろう。身と心との健全なる発達を図るのが其目的である」⁽⁴⁵⁾と説明し、その上で、

功名富貴は修養の目的とすべきものでない、自ら省みて屑しとし、如何に貧乏しても、心の中には満足し、如何に誹謗を受けても、自ら楽み、如何に逆境に陥っても、其中に幸福を感じ、感謝の念を以て世を渡ろうとする。

それが、僕の茲に説かんとする修養法の目的である。⁽⁴⁶⁾
と記している。

ところで、平成十八年（二〇〇六）に改正された教育基本法の第九条第一項では、

法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

と定められている。この条文について国会で、「教育の本質は教員と児童生徒の人格的な触れ合いにあり、単なる知識、技術の伝達にとどまらないものであることから、公教育の担い手である教育公務員には絶えず研究と人格の修養に努めることが求められており」⁽⁴⁷⁾と説明されている。

以上より、「修養」とは「身を修めて心を養う」、すなわち、ある行為を努めて執り、人間性（人格）を形成すること、という解釈が一般的と言えよう。

これに対して大倉は、「修養」の「修」について、

修養の「修」といふ字は壊れた物を修繕する「修」の字である。即ち人間に生れながらに持ったところの立派なる魂が、この実人生に生活してゐる間にいろいろ汚れる。欲張りが出たり、争ひが起つたり、その外いろいろ醜さといふやうなもので塵芥^{ごみ}がたかる、即ち壊れてゐる。それを修繕するという意味です。修繕とは完全なる姿を予想してゐるが故に修繕する。⁽⁴⁸⁾

と述べ、そして「養」は、

本来修養の修といふ字は、修繕の修の字で、壊れかゝつたものを完全にする意味でありますし、修養の養という字も養ひ育てる意味であります。即ち壊れかゝつて居るものを完全にして、養ひ育てるのが本当の修養であります。人間が生れながらにして与へられて居る立派な種を伸ばす事でありまして、縛る他律道德ではなく、内に活動の根本力を養ふ事であります。⁽⁴⁹⁾

と解釈している。

大倉は、人間性（人格）とは何かしらの行為を通じて形成するものというよりも、本来備わっている本性を自己認識することで顕現するものであると考えていたのである。

こうした考え方は、大倉が持つ世界観や人間観と密接なつながりがあると思われる。大倉は、宇宙のすべての存在を生かし成り立たせている不可思議な「自然の生命、宇宙の生命の力」があり、これを「宇宙心」と呼んでいる。そして、人間誰しもがその「宇宙心」を内在しているはずが、「後天的な肉体我」や「色々の経験」によって生じる「心、考、欲望」によって、多くの人びとが「忘れて」いる、あるいは自覚していないとしている。⁽⁵⁰⁾特に、（一）「物欲（利欲）」（利益を得たいという心）、（二）「名聞欲」（人に知られよう、自慢しようという心）、（三）「勝他欲（優勝欲）」（人を押しのけてでも勝つてやろうという心）の三欲は、人びとの行動をしばしば誤らせるといふ。したがって、大

倉は社員教育のテキストであった『小店員の心得』で、

万物は同根同質にして然かも其中には不思議な宇宙生命の流れがあり、其の流れの力は無限にして、永遠なものであります。然るに人間は自分の小さき智慧や経験にのみ頼つて、根本の大きな力を忘れて意識しないから、其の力がかくれてしまつて居ります。(中略)人間は中味のきれいなものを外の汚い皮で包んで居る様なものですから、ラツキヨの皮をむく様に外の平凡な考へ方をはぎとつて行くと、中には純白な交り気のない根本生命があります。坐禅等をするのも、信心するのも、修養するのも、人間の根本生命無限の力を湧き出させる為なんです。いい、ほかにも

如何なる宗教も、究極する所は、自分の内に在る靈性を見出して、それを磨き出すことにあります。(中略)それがある故に修行も成立つ訳で、瓦を磨いても玉にはなりません、元々靈性と云ふ玉を持つて居るから、磨けば光を放つのであります。⁽³²⁾と語っているのである。

以上より、改めて整理すると、大倉の説く修養とは、「壊れかゝつて居る心を修めて、活動の根本力を養うこと」と定義できるであろう。

(二)「修養」における「行」とは

すでに紹介した通り、大倉山修養会ではさまざまな行事が行われていたが、これらは上述した大倉が考える「修養」を行うための手段、方法であった。大倉は一連の行事を「静的修養」と「動的修養」に分けて説明している。まず、「静的修養」とは「靈性、即ちたましいの自覚」が目的とする行事としている。その内容を、

世の中のと凡ゆる物は、決して偶然に出来た物ではありません。すべて永遠の生命、無限の力に繋がって、整然たる機能と体系を与へられて出来たのであります。然るに人間だけが、別物であらう筈はないのであります。私共人間も亦永遠の生命、無限の力に繋がって居るのであります。(中略)心の主人公である魂が、ハツキリして居てこそ、始めて後天的な知識も経験も財産も生かされて、夫々の力を發揮する事になるのであります。と語っている。ここから推すと、「無言の行」や「定坐」などがこれに該当するのであらう。

もう一つの「動的修養」に該当するのは「食事」や「作務」である。ここで重要なのは、単に「動く」「体を使う」ということが目的ではないということである。参加者の感想文の中には、大倉山修養会の作務は他の会場のそれに比べると容易で、もっと重労働を課すことが必要ではないかという意見がある。しかし、大倉がこの提言を受け入れることはおそらくなかったであらう。

大倉が遺した書幅の一つに、道元『典座教訓』の一節である「以絆為道心」がある。その意味するところを、次のように語っている。

禅宗の方面で殊に重んぜられて居る作務と云ふ事が御座いますが、それは雑巾を持つて板の間を拭くとか、箒を持つて庭を掃くとか云ふ、詰らぬ仕事であつても、唯そこを綺麗にするといふ目的の外に、坐禅工夫と同様の深い内容を、仕事そのものの中に求めようとする態度であります。³⁴⁾

つまり非日常的な重労働ではなく、掃除や食事といった日常生活での営みにこそ集中して取り組み、そこから悟り、気づきを見出すことを重んじたのである。大倉が「世間は道場」といい、

静かに読書して心を養ひ、神仏に頷く敬虔な心を持ち乍ら、社会生活には、世間的な他の心を以てする。両者分裂するから、神仏の恵みは感通しない。³⁵⁾



【図9】揮毫「魂を〜」(研究
所沿革史資料11342)

と語っていたのは、こうした観点からであろう。

冒頭に掲げた和歌「魂をうちだす鍛冶のころもてはげみつくれよ日の本のわざ」と併せて、大倉は玉鋼を鍛造する鍛冶師を墨で描いている(【図9】)。この絵を、

知識、理性は何程積上げても、体験的習練と信仰によって裏付けられなければ、まさかの時に、役

立たない。智識、理性は正宗の刀に当り、体験的習練は剣術に当り、信仰は腹に当る。³⁶⁾

という大倉の言葉を踏まえて解釈すると、材料の玉鋼が「智識、理性」で、道具の小槌が「体験的習練」に当たり、そしてよりよい刀剣を打つためには技術が不可欠で、それが「信仰」が相当するのではないだろうか。

ポンプが多量の水を吐き出す為には呼水が必要である。此呼水こそは自意識の修養修行である。更に無量の水を求めるなら、不断の動力が必要である。我等も信仰・体験を多く望むなら、それだけ不断の修養は当然である。³⁷⁾

したがって、大倉が大倉修養会を「本所の研究の一面と併行して教育的実践の重要部門をなすもの」と位置付けたのは必然であったのである。

おわりに

以上、大倉山修養会の概要、そして大倉邦彦が考えていた「修養」から各行事の位置づけを考察してみた。大倉は

修養の継続性の重要性を、次のようにも語っている。

人間には人相応に重大なる任務を果すべき使命がある。その為には心に堅き信念を必要とする。信念なき仕事は砂上の楼閣である。されば根本動力としての信念を養ふことが修養であらねばならぬ。此信念は人が重大使命の何たるかを見誤る場合にも、正しき指針を与へてくれる。⁵⁸⁾

大倉山学生修養会の参加者名簿には、繰り返し参加している名前も見られる。彼らにとって修養会を通じて得たものが極めて大きかったのであろう。一方で、大倉精神文化研究所がそびえ立つ小高い丘から降り、普段の環境に身を置くと日常に流されてしまう、そうした感想も少なくはない。

折角積み上げた修養も、僅かの事から崩れ易いのは、心鏡の磨きが足りない原因ばかりではない。それは端的に心の鏡が曇るからだ。鏡は物を映す度毎に曇りを拭き取る事が肝腎だ。⁵⁹⁾

修養会の再参加はいわば「曇りを拭き取る」という営みに相当するのであろうが、修養会は四六時中開催されていたわけではない。そこで、大倉は修養会を貫く精神を要約して、「三箇の信条」「五個の実践」を作っている。

三箇の信条

一 皇国精神を深める事

一 世の為め家の為め尽くす事

一 真心をもって物事を判断する事

五個の実践

一 朝早く起きて神仏を拝む事

一 物を大切にし、食物は頂いて食べる事

一 勤労を喜び、人の嫌う仕事は先に立って行う事

一 礼節と規律とを守る事

一 自分の事は自分でする

概念的な文句ではなく、「世間は道場」と唱えた大倉らしく、日々の営みに沿った内容であるところが特徴である。これを、仏教における四弘誓願^{しごうせがん}、あるいは『葉隠』の葉隠四誓願に倣ってか、折々に口に出し、あるいは目で視ることで、修養会中の心持ちと同じ状態にあるうとしたのであろう。

大倉山修養会が開催されていたのは約七、八十年前で、当時の世相が講話の内容や表現、行事内容などに反映されている。しかし、大倉が抱いていた世界観や人間観、大倉山修養会を貫いていた修養論には、普遍的な面も見えてとれる。今回の試論を踏えて、修養会については今後も資料の調査分析を進め、その実態をさらに掘り下げるとともに、同時代における他団体が行っていた修養会との比較などを試みたいと考えている。

（編者付記） 本稿は、令和三年（二〇二二）五月十五日の大倉山公演会における「魂をうちだす鍛冶のころもて―大倉山修養会の目的と実践―」（横浜市大倉山記念館ホール）と題する講演の記録を基に、加筆修正を加えて成稿したものである。

注

（1） 以下の記述は、拙稿「世の為に田を耕す・大倉家三代の生き方・第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて」（『大倉山論集』

魂をうちだす鍛冶のころもて（星原）

第六五輯、大倉精神文化研究所、平成三十一年）の記述に拠った。

(2) 『商売往来』（大倉精神文化研究所蔵「研究所沿革史資料」1433）。

(3) 『大倉洋紙店綱領』（「研究所沿革史資料」5343）。もともとは義父で、二代目社長の大倉文二が大正九年一月十三日に作成したもので、その後、大倉邦彦が加筆修正して、昭和九年と昭和十四年に改訂版が作成されている。表現の変化は所々に見られるが、綱領全体の方針は一貫している。

(4) 感想97「神ながらの商売道」（財団法人大倉精神文化研究所編『大倉邦彦の『感想』・魂を刻んだ随想録』平成十五年、一七九頁）。大倉は日々の生活や心のあり様などに関する随想を、社員教育用として『感想』と題する冊子に纏めて、大正十四年（一九二五）から昭和十二年（一九三七）にかけて発行した。またのち監修した雑誌『躬行』にも「感想」欄を設け、随想を発表している。右の『大倉邦彦の『感想』』はそれらを一冊にまとめた、大倉の思想を考察する上で不可欠の書物である。冒頭の数字は同書の通し番号である。

(5) 大倉の思想については、田代武博「大倉邦彦における「行の教育」―思想的枠組みと佐賀県における実践―」（『大倉山論集』第四六輯、公益財団法人大倉精神文化研究所、平成十二年）も参照されたい。

(6) 『皇紀二千五百九十二年度 私の使命事業』（「研究所沿革史資料」208）。

(7) 『皇紀二五九四年度版 私の使命事業』（「研究所沿革史資料」212）。

(8) 大倉精神文化研究所附属図書館が所蔵する「貴重コレクション」の一つ。研究所に現存する研究所設立前からの一次資料や他機関などで蒐集した資料群である。現在、附属図書館のOPACで検索できるようデータ公開を進めている。

(9) 『皇紀二千六百年五月増補 使命事業』（「研究所沿革史資料」220）111～113頁。

(10) 「中学生夏期講習会趣意書」（「研究所沿革史資料」1516）。

(11) 拙論「世の為に田を耕す―大倉家三代の生き方―第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて―」（『大倉山論集』第六五輯、平成三十一年）参照。

- (12) 『躬行』第一号、昭和九年三月刊行（『研究所沿革史資料』840）。
- (13) 「婦人修養会案内状」（『研究所沿革史資料』1518）。
- (14) 『道本円通』（『研究所沿革史資料』810）五六～五七頁。
- (15) 同会については、林宏美「大倉邦彦と富士見幼稚園二〇年のあゆみ―戦前・戦中の私立幼稚園の資料から―」（『大倉山論集』第六二輯、公益財団法人大倉精神文化研究所、平成二十八年）を参照。
- (16) 前掲注9「皇紀二千六百一年五月増補 使命事業」一三頁。
- (17) 大倉邦彦『日本産業道』（日本評論社、昭和十四年八月）。
- (18) 「委嘱状、大日本産業報国会理事」（『研究所沿革史資料』733212）。
- (19) 前掲注9「皇紀二千六百一年五月増補 使命事業」一三頁。
- (20) 前掲注10「中学生夏期講習会趣意書」。
- (21) 感想641（前掲注4「大倉邦彦の『感想』」、二一九頁）。
- (22) 感想643（前掲注4「大倉邦彦の『感想』」、二一九頁）。
- (23) 東京土木建築業組合『修養会誌』（昭和十四年）（『研究所沿革史資料』1347012）二〇頁。
- (24) 前掲注23「修養会誌」（昭和十四年）九頁（『研究所沿革史資料』1347012）。
- (25) 大倉邦彦『勤勞教育の理論と方法』（三省堂、昭和十二年）一八〇頁。
- (26) 「神奈川県庁吏員修養会（第八回、感想文集）」（『研究所沿革史資料』2233）。
- (27) 「神奈川県小学校長修養会（感想文集）」（『研究所沿革史資料』2235）。
- (28) 大倉の参禅については、納富常天「大倉邦彦の禅受容」（『大倉山論集』第五〇輯、平成十六年）などを参照。
- (29) 前掲注25『勤勞教育の理論と方法』一六七～一六八頁。
- (30) 『躬行』第八号、昭和九年十月刊行（『研究所沿革史資料』861）。

- (31) 前掲注23 「修養会誌」三六～三七頁。
- (32) 前掲注25 『勤勞教育の理論と方法』一七一～一七三頁。
- (33) 「埼玉県女子師範学校生徒修養会（感想文集）」（『研究所沿革史資料』2301）。
- (34) 前掲注25 『勤勞教育の理論と方法』一七四頁。
- (35) 前掲注27 「神奈川県小学校長修養会（感想文集）」。
- (36) 『躬行』第三号、昭和九年五月刊行（『研究所沿革史資料』846）。
- (37) 新村出編『広辞苑』（岩波書店、平成二十年第六版）一三三三頁。
- (38) 三省堂編修所編『広辞林』（三省堂、昭和五十八年第六版）九三二頁。
- (39) 三省堂編修所編『大辞林』（三省堂、平成元年第一版）一一三九頁。
- (40) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典第十卷』（小学館、昭和六十二年第一版）三〇九頁。
- (41) 以下の記述は、王成「近代日本における〈修養〉概念の成立」（『日本研究』二九、国際日本文化研究センター、平成十六年）の記述に拠った。
- (42) サミュエル・スマイルズ『自助論(Self-Help)』（『プロジェクト・グーテンベルク』<https://www.gutenberg.org/cache/epub/935/pg935-images.html>、令和三年十二月十五日閲覧）。
- (43) 斯邁爾斯著、中村正直訳『西国立志編』第二編（須原屋茂兵衛、明治四年）二丁ウ。
- (44) 新渡戸稲造『修養』（実業之日本社）。初版は明治四十四年（一九一一）九月に刊行され、大正二年（一九一三）一月には二五版（国立国会図書館デジタルコレクション）、となっている。
- (45) 前掲注44 『修養』四頁。
- (46) 前掲注44 『修養』一六頁。
- (47) 藤原誠発言（第一九二回国会・衆議院・文部科学委員会第五号、平成二十八年十一月二日）。

- (48) 前掲注23『修養会誌』二頁。
- (49) 大倉邦彦『処世信念』（大倉精神文化研究所、昭和十二年）八四～八五頁。
- (50) 『小店員の心得』（『研究所沿革史資料』266）五二頁。
- (51) 前掲注50『小店員の心得』五三～五四頁。
- (52) 前掲注49『処世信念』九三頁。
- (53) 前掲注49『処世信念』九〇～九一頁。
- (54) 前掲注49『処世信念』九六頁。
- (55) 感想223「信仰と生活の一如」（前掲注4『大倉邦彦の『感想』』、一八九頁）。
- (56) 感想243「近代の学問は量の水練」（前掲注4『大倉邦彦の『感想』』、七八頁）。
- (57) 感想233「修養は呼水」（前掲注4『大倉邦彦の『感想』』、一一一頁）。
- (58) 感想151「修養と信念」（前掲注4『大倉邦彦の『感想』』、一五九頁）。
- (59) 感想120「曇り易い心鏡」（前掲注4『大倉邦彦の『感想』』、三九～四〇頁）。

